

INDEX

リレー随想 日々感懐 (厚生労働省大臣官房厚生科学課長 三浦 公嗣氏) (p1) / 助成案件・一般演題募集 (p2) / 研究助成成果報告 3 編 (p4) / 「温故知新」-助成研究者は今- (中島 和江氏) (p7) / 第 16 回ヘルスリサーチフォーラム及び平成 21 年度研究助成金贈呈式を開催 (p8) / 第 18 回 (平成 21 年度) 助成案件採択一覧表 (p13) / 第 6 回ヘルスリサーチワークショップを開催 (p16) / 第 6 回 HRW に参加して (岡田 真平氏、猪飼 宏氏、竹田 明弘氏、中村 明澄氏) (p20) / 第 36 回評議員会並びに第 36 回理事会を開催 (p22) / 平成 22 年度事業計画概要、予定表 (p23) / 第 17 回ヘルスリサーチフォーラム予告 (p26) / ご寄付のお願い (p26)

HEALTH RESEARCH NEWS

ヘルスリサーチニュース



Vol.55

2010年4月

主な
内容

助成案件募集・一般演題募集

第 19 回助成案件を募集します。本年度は助成件数・総額を拡大しています。同時に 11 月に開催のヘルスリサーチフォーラムでの一般演題を募集します。

「温故知新」-助成研究者は今-

第 14 回国際共同研究助成採択者の助成を受けられた中島和江先生に、ご研究のその後と近況をご報告頂きました。

第 16 回ヘルスリサーチフォーラム開催

午後からの開催で、メインホールで密度の濃い 16 題の演題の研究成果発表と討議が繰り広げられ、活況なフォーラムとなりました。

第 6 回ヘルスリサーチワークショップ開催

“プロフェッショナリズム再考-希望と成熟の社会を目指して-”のテーマの下に、“出会い”と“学び”の熱い集いが行われました。

第 20 回リレー随想 日々感懐

臨床研究のすすめ

わが国では、質や量の両面において世界的にも定評のある基礎研究に比べて、より日常の医療現場に近い環境で行われる臨床研究は欧米諸外国に比べて低調と言われてきたが、医学・医療を含めて急速に発展するアジア諸国の現状等を見ると、その将来はさらに厳しいと考える専門家も多いと思われる。

国民の健康は世界で最も高い水準にあるが、その背景には国民皆保険制度に代表される社会保障制度の充実と並んで、最新の医学・医療技術を速やかに現場に導入してきた関係者の努力がある。今後も国民の健康を高い水準で維持していくためには、これらの仕組みが引き続き有効に作用するようにすることが肝要であり、特に、臨床研究に従事できる余裕を医療現場に確保することに留意すべきと考える。

一方、基礎研究と臨床研究の一層の連携を図るためにいわゆる橋渡し研究の充実が指摘されている。わが国では基礎研究に従事する研究者に医師が占める割合が高いのではないかと感じる。このような特徴を生かして臨床現場の課題がより適切に基礎研究に反映されてきたからこそ、わが国の基礎研究の発展があったとするならば、その逆もあってよい。基礎研究に従事する医師からの発信に期待したい。



三浦 公嗣

厚生労働省大臣官房
厚生科学課長

次回は東京大学名誉教授 出月 康夫先生にお願い致します。

第19回 (平成22年度) 研究助成案件 を募集します

第19回研究助成案件の募集を下記の通り行いますので、ご案内申し上げます。本年度も国際共同研究・国内共同研究とも助成件数を大幅に拡大して、より広く助成が行き渡るようになっております。詳細については、当財団ホームページ、又は、各大学、研究機関などに送付しております案内リーフレットや募集広告をご覧ください。

助成件数を
大幅に拡大
しました

- 研究対象** 保健医療・福祉分野の政策、あるいはこれらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチ領域の研究
- 応募規定**
- 1 **国際共同研究【国際的観点から実施する共同研究】**
 期間1年間 1テーマ当たり 300万円以内 10件程度
 共同研究者：海外研究者を1名以上含めること
 - 2 **国内共同研究【国内での共同研究】(年齢制限なし)**
 期間1年間 1テーマ当たり 100万円以内 15件程度
 共同研究者：同一教室内の研究者は対象としない
 - 3 **国内共同研究【国内での共同研究】(年齢制限あり：平成22年4月1日現在満39歳以下)**
 期間1年間 1テーマ当たり 100万円以内 15件程度
 共同研究者：同一教室内の研究者は対象としない

応募期間 平成22年4月～平成22年6月30日(水)(当日消印有効)

助成決定 平成22年9月下旬

応募方法 応募要綱・申請書フォーマットをご希望の方は、本財団のインターネットホームページからダウンロードをお願い致します。▶▶▶ URL : <http://www.pfizer-zaidan.jp>

第17回 ヘルスリサーチフォーラム 一般演題 を募集します

本年も下記により、第17回ヘルスリサーチフォーラムの一般演題を募集致します。申込期間は4月～6月30日(水)(当日消印有効)ですので、奮ってのご応募をお待ち致します。

- **フォーラム基本テーマ**
 「社会と共進化 (co-evolution) するヘルスリサーチ」
- **研究内容**
 制度・政策、医療経済、保健医療の評価、保健医療サービス、保険医療資源の開発、医療哲学等のヘルスリサーチの研究
- **応募方法**
 財団ホームページから、財団所定の申請書式 (Windows Wordファイル) をダウンロードして、必要事項をパソコン入力の上、当財団事務局宛にファックス、或いは郵便でお送り頂くと同時に、E-mailにWordファイルを添付して、当財団メールアドレスへお送り下さい。
- **申込期間**
 平成22年4月～平成22年6月30日(水)(当日消印有効)
- **発表**
 組織委員会で採否を決定し、8月中旬頃に連絡します。採用の場合は平成22年11月6日(土)会場「千代田放送会館」(東京都千代田区紀尾井町)で開催する第17回ヘルスリサーチフォーラムにおいて15分程度(含むQ&A)のご講演によるご発表となります。詳細は採否の連絡後、お知らせ致します。
- **発表演題の機関誌等への掲載**
 フォーラムで発表された研究内容は、財団の機関誌(本誌)等へ掲載致します。また、第17回ヘルスリサーチフォーラム講演録としてまとめ、配布致します。
- **演題発表のための交通費**
 演題が採択された場合、首都圏以外(但し海外を除く)の一般演題発表者(発表者本人のみ)には、フォーラム開催都市までの交通費を財団の規定により支給します。(宿泊費につきましても発表者の負担となります。)

ヘルスリサーチの 研究領域と例示

ヘルスリサーチとは

一人ひとりのクオリティ・オブ・ライフ（QOL）の向上を目的として、自然科学（医学、薬学、健康科学等）や社会科学（法学、経済学、社会学等）の成果を基に、変化する社会の中で、全ての人にとって最適なケアを享受できるための仕組みを研究し、社会に提言する学問です。

本財団は国際的視点からのヘルスリサーチの研究を助成します。

制度・政策

- ・ 医療・介護サービスの質の確保に関する制度の研究
- ・ 社会保障制度・政策の研究
- ・ 薬価・薬事制度の研究
- ・ 人口減少社会における医療福祉の研究

など

医療経済

- ・ Pharmaco Economicsの研究
- ・ 医療における費用対効果の研究
- ・ 医療における技術革新の経済評価の研究
- ・ 医業経営に関する研究

など

保健医療の評価

- ・ 医療の質とEBMの適用の研究
- ・ 文化・制度の違いによる疾患治療の相違の国際比較研究
- ・ 保健医療のOutcomeの研究
- ・ 医療福祉経営における品質管理手法の研究

など

保健医療サービス

- ・ 患者・家族の精神的ケアの研究
- ・ 保健医療サービスにおけるヘルスプロモーション等の研究
- ・ 在宅医療を含む医療施設の機能評価の研究
- ・ 情報化社会の保健医療に及ぼす影響の研究
- ・ 患者の受診行動とヘルスコミュニケーションの研究
- ・ 保健医療における危機管理の研究

など

保健医療資源の開発

- ・ 医学教育を含むヘルスマンパワーの研究
- ・ ゲノム開発等のイノベーションと新薬開発コストに関する諸問題の研究
- ・ 新薬開発のグローバル化と薬事政策に関する国際比較研究
- ・ 医療と知的財産権に関する研究

など

医療哲学等

- ・ 地球環境に関連したヘルスリサーチ
- ・ 尊厳死・死生観に関する諸問題の研究
- ・ 医療倫理・生命倫理に関する研究

など

研究助成のご応募、並びに一般演題のご応募は
まず、当財団ホームページへ



<http://www.pfizer-zaidan.jp>

平成 19 年度
国際共同研究

日本人におけるヘルスリテラシーと健康関連行動、 医療関連サービスの利用、健康関連クオリティ・オブ・ ライフとの関係についての疫学的研究

研究期間：2007年11月1日～2008年10月30日

代表研究者：筑波大学大学院人間総合科学研究科臨床医学系 教授

徳田 安春

共同研究者：ライフプランニングセンター 最高顧問

道場 信孝

共同研究者：Harvard Medical School Associate Professor

James P. Butler

共同研究者：University of New Mexico Associate Professor

Peter Barnett

目的：わが国の成人における、ヘルスリテラシーの現状とクオリティ・オブ・ライフとの関連性について評価した。

対象：20歳以上の日本人成人 **デザイン：**横断研究

データ収集：基本的な demographics や慢性疾患の有無と程度に加え、社会経済的因子についても調査した。ヘルスリテラシーについては、欧米で標準的に使用され、妥当性と信頼性の高い、質問票の日本語版を作成して評価した。健康行動については、喫煙、飲酒、食生活、および健康診断への参加などについて評価した。医療や健康サービスの利用内容については、受診行動の内容と頻度、補完代替療法の利用頻度などについて調査した。健康関連クオリティ・オブ・ライフについては、日本語版 WHOQOL-BREF を使用した。イフェクトサイズの評価には、Cohen の方法に準じて行なった。ヘルスリテラシーとクオリティ・オブ・ライフの関連性について、回帰モデルによる多変量解析にて分析した。

結果：1040人(平均年齢57歳、52%が女性)のうち、161人(15.5%：95%信頼限界13.3-17.7%)がヘルスリテラシーのレベルに問題があった。学歴とヘルスリテラシーのレベルには有意な関連を認めた($p = 0.002$)。ヘルスリテラシーのレベルが低い人は、高い人と比べ、身体的 QOL (60.6 vs. 71.7, $p < 0.001$) および心理的 QOL (59.7 vs. 68.3, $p < 0.001$) が有意に低かった。この結果は、慢性疾患の有無、社会経済的因子、健康行動について調節したモデルでも有意であった(両 QOL とも $p < 0.001$)。イフェクトサイズの評価では、身体的 QOL の差は中等度、心理的 QOL の差は軽度であった。

結語：多くの日本人でヘルスリテラシーに問題があり、またそのような人々は QOL の低さと関連していた。今後、日本人における現状フォローと機序の解明が望まれる。

成果発表：

雑誌掲載

- 雑誌名 Life Planning Center Annual Report
論文標題 Health Literacy and Health-related Quality-of-life in Japanese Adults
著者名 Yasuharu Tokuda, et al
発行年月 2008年10月(28巻号)
- 雑誌名 Patient Education and Counseling
論文標題 Health Literacy and Health-related Quality-of-life in Japanese Adults
著者名 Yasuharu Tokuda, et al
発行年月 2009年6月(75巻号)

学会発表

- | | |
|-------|---|
| 学会名 | Society of General Internal Medicine Annual Meeting |
| 発表テーマ | Health Literacy and Health-related Quality-of-life in Japanese Adults |
| 発表者 | Yasuharu Tokuda, et al |
| 発表年月日 | 2009年5月13日 |

平成 18 年度
国内共同研究

臨床評価過程における累積情報の 統合的活用に向けた統計基盤の研究

研究期間：2006年11月1日～2007年8月31日

代表研究者：大阪大学臨床医工学融合研究教育センター
特任准教授（常勤）

共同研究者：大阪大学大学院医学系研究科 准教授

共同研究者：東京理科大学工学部経営工学科 教授

寒水 孝司

濱崎 俊光

吉村 功

本研究では、近年提案されている統計的方法論の特徴・性能、実用化の条件を理論的・实际的に明確にし、累積された科学的根拠・情報を適応的に臨床評価に利用するための統計基盤について検討した。研究の実施にあたり、統計数理研究所 重点型共同研究と科学研究費補助金シンポジウムとの共催で開催した「医薬品評価における統計的方法の新展開」で本研究課題に関連するセッションを設け、日本の臨床試験の問題点や最新の研究成果を整理した。最終的に本研究では、以下に述べる結論を導いた。

- (1) 適応的試験計画について、数学的モデルに基づく議論・研究が活発する一方で、それが実際の臨床試験の発展に寄与するには、実際の検討が不足しているという結論を導いた。
- (2) 複数の主要評価変数への対処について、主要評価変数間の相関を考慮した症例数設計法の拡張の方向性を整理した。多次元片側検定問題として、近似片側尤度比検定の拡張を行い、既存の方法との性能比較をもとに、提案した方法の有用性を示した。さらに、近年提案された検定の保守性を緩和させる症例数設計法の弱点を明らかにした上で、実際の臨床試験への適応については、正当化のための十分な根拠が必要であることを示した。
- (3) データ適応型生存時間解析について、拡張ハザードモデルにおけるモデル選択のための尤度比検定の性能を明らかにした上で、スプライン関数を導入したハザードモデルを提案し、その有用性を示した。さらに、財団法人癌研究会が公開している胃癌患者の大規模データに提案した方法を適用し、胃癌治療の年代的進歩を定量的に評価した。

成果発表：

雑誌掲載

雑誌名	Japanese Journal of Biometrics
論文標題	Survival analysis for gastric cancer using the Japanese foundation database based on a generalized hazards model incorporating B-spline functions
著者名	Hisao Takeuchi, Isao Yoshimura, and Chikuma Hamada
発行年月	2007年12月(28巻2号)

学会発表

学会名	2007年度統計関連学会連合大会
発表テーマ	主要評価変数が複数ある臨床試験における症例数設計
発表者	寒水 孝司
発表年月日	2007年9月8日

平成 18 年度
国内共同研究

患者、患者家族、医療者の暗黙知を形式知にすることで 相互のコミュニケーションの向上を図り、学問とすることで 医療メディエーターを育成し、患者、患者家族、 医療者の間にはいり相互の信頼関係の構築を補助する。

研究期間：2006年11月1日～2008年3月31日

代表研究者：東京大学医科学研究所 特任助教

共同研究者：都立墨東病院 血液内科 医長

田中 祐次

濱木 珠恵

【背景と目的】医療において、患者と医療者との関係を改善することが求められている。そのためには医療者、患者、患者家族、それぞれの間の理解を深める必要がある。我々は、今まで認識されることのなかった“暗黙知”を“形式知”にすることが、両者に「気づき」をもたらし、相互理解につながると考えた。そこで、多数のインタビューを情報工学的手法を用いて解析し、「気づき」の発見作業を行ってきた。

今回は、パイロットケースとして行った「骨髄移植ドナーに選ばれなかった同胞のストレス要因の検討」について報告する。

【研究内容】対象は、20年前に骨髄移植を受けた妹を持つ47歳女性。患者の白血病発症から骨髄移植を経て現在までの心境に関して、自由質問形式で1時間11分のインタビューを行い、その内容を「チャンス発見」という新規のデータマイニング手法を用いて解析した。チャンス発見では、文章データに含まれる語の関係を共起度で測定し、Scenario Mapを作成することで語のネットワークを表現する。共起度(C)は、Jaccard係数を用いて求める。

インタビュー内容のテキストデータにつき単語の出現頻度と関係性に基づいてScenario Mapを作成し、医師、看護師、情報工学者が議論して解釈を行った。その後、被験者にScenario Mapの妥当性について意見を聴取した。

今回の研究内容は東京大学医科学研究所の倫理委員会にて承認されている。

【成果】医師・看護師・情報工学者での議論では、「苦しみ」や「麻痺」という言葉が表現されていることから「被験者にはドナーになれなかった苦しみが存在している」との解釈に至った。そして被験者にScenario Mapを提示したところ、「この図は納得いく結果で、夫・子との家庭生活を最も大切に考えている」とのコメントを得た。

【考察】これまで患者やドナーに対しての精神的な負担等に関しては研究されてきた一方で、ドナーに選ばれなかった家族については、医療者や研究者は関心を示してこなかった。今回の研究では、ドナーに選ばれなかった同胞にも移植治療に関連した心理的負担が存在し、移植治療の終了から20年が経過してもなお、その感情を持ち続けていることが明らかとなった。

今回の研究では、インタビューを情報工学的手法を用いて解析した際、研究者だけではなく被験者本人も参加することで新たな「気づき」を得ることができた。現在、症例を増やして解析と検討を続けており、医学と情報工学の連携研究の確立を目指している。

成果発表：

図書

書名	老年者造血器疾患研究会誌	出版先	老年者造血器疾患研究会
著者名	田中 祐次	発行年月	2008年5月

学会発表

1.学会名	日本血液学会	発表者	田中 祐次
発表テーマ	患者学	発表年月日	2008年10月12日
2.学会名	看護科学学会	発表者	田中 祐次
発表テーマ	看護研究の新たな夜明け ー「チャンス発見」によるデータ解析	発表年月日	2008年12月13日

その他

温故知新一第8回一

財 団 助 成 研 究

… その 後

第14回(平成17年度)国際共同研究助成採択者

大阪大学医学部附属病院
中央クオリティマネジメント部長 病院教授 中島 和江

私とファイザーヘルスリサーチ振興財団研究助成制度との出会いは、平成9年度国際共同研究「医療過誤訴訟の報道が医療に与える影響に関する研究」にさかのぼります。これは、厚生省保健医療局国立病院部運営企画課におられた鹿内清三先生を代表者とする研究で、私は共同研究者として参加いたしました。当時、私はハーバード公衆衛生大学院に留学し、ハーバードリスクマネジメントファンデーションでインターンシップを行っていました。米国のヘルスリサーチがカバーする領域の広さと研究者の層の厚さに圧倒されっぱなしであった私にとって、この助成金を得て他領域の方々とともに国際的な研究を行う機会を得たことは、大きな励みになるとともに、自分自身の将来の目標に対する確かな手応えを感じるキッカケにもなりました。

帰国後まもなく、米国の「School of Public Health (公衆衛生大学院)」における教育の実際について、文部科学省でお話をする機会をいただきました。その内容が後日「大学と学生」という雑誌に掲載されており、今回、もう1度読み返してみました。「ヘルスリサーチは、公衆衛生学に携わる者のみが必要とするものではなく、医療に関係するあらゆる職種の者にとって必要なものである。人間相手の仕事である医療の現場は、徹底なりアリズムの世界であり、従来の医学教育と臨床研究及び基礎研究のようなサイエンスだけでは解決できない問題があまりにも多い。……本来、これらの難問はヘルスリサーチの守備範囲であり、その解決には多くの領域の厳密な学問的手法を必要とするものである」などと、医学界の重鎮たちを前にヘルスリサーチの重要性を説いていたようで、今となっては汗顔の至りです。

とはいえ、このことが御縁となって本財団のヘルスリサーチワークショップに世話人として参加しないかというお誘いがありました。第4回では恐れ多くも代表幹事まで務めさせていただきましたが、私にとっては大変な幸運でした。議事録を紐解けば第1回のヘルスリサーチワークショップ企画委員会では、全国から集まった世話人たちの議論を受けた開原先生の「『あそこにああいうことをやっている人がいる』ということが分かることが大切なのだ」という御発言が残されており、あらためて黎明期の熱気を思い出します。その後、平成17年度には本ワークショップの仲間とともに「高品質医療の提供と高収益医業を両立させる経営品質管理システムの研究」というテーマの国際共同研究を行う機会もいただきました。

臨床医から方向転換して飛び込んだヘルスリサーチの世界ですが、それまでとは違った幅広い視点で医療を見ることができるようになりました。これからも本財団の研究助成制度やワークショップ等を通じてヘルスリサーチの仲間の輪が広がり、世界から評価される研究成果が日本から発信されることを願っています。

第16回 ヘルスリサーチフォーラム 及び 平成 21 年度 研究助成金贈呈式を開催



平成 21 年 11 月 7 日 (土) 千代田放送会館 (東京都千代田区紀尾井町) にて、約 150 名の参加者による第 16 回ヘルスリサーチフォーラム及び平成 21 年度研究助成金贈呈式が開催されました。今回も昼からの開催となり、4 つのセッションにより、密度の濃い発表が行なわれました。また、フォーラム終了後は情報交換会が開催され、参加者相互の人的ネットワーク作りの機会が提供されました。(この項、敬称略)

1 開会挨拶

12:00 ~ 12:15

財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団 理事長

島谷 克義

財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 専務理事

岡部 陽二



左から、島谷克義氏、岡部陽二氏

2 研究発表

12:15 ~ 17:00

テーマ：医療のアウトカム

座長 小堀 鷗一郎

国立国際医療センター 名誉院長



☆ 前立腺癌集団検診における年齢階層別検診法に関する費用対効果研究

京都大学大学院 医学研究科 泌尿器科学分野 医員 小林 恭

前立腺癌は高齢者に好発し比較的治療後の良好な疾患であるため、真に費用効果的な検診法の開発には、検診受診者の年齢階層別運用が有効であると考えられる。日本泌尿器科学会編 前立腺癌検診ガイドラインによれば、ベースライン PSA 値 1 ng/ml 未満の場合、検診受診間隔は 3 年毎と推奨されている。本研究の目的は前立腺癌集団検診における受診者の年齢の意義を明らかにする事であり、今回は、このベースライン PSA 値による検診受診間隔設定の妥当性を年齢階層別に検討した。

☆ 慢性心不全患者の予後・QOL の向上を目指した疾病管理プログラムの構築

北海道大学 大学院 医学研究科 眞茅 みゆき

慢性心不全は予後不良の症候群であり、増悪による再入院を繰り返し、QOL も低下する。欧米では、医師、看護師、薬剤師、栄養士などの多職種がチームを組んだ疾病管理プログラムが、心不全患者の予後や QOL の改善に有効であることが報告されている。しかし、疾病管理プログラムは、その国の医療制度や社会福祉制度の影響を受けるため、海外での研究結果をそのままが国に当てはめることはできない。本研究は、日本の慢性心不全患者の予後、精神心理状況、QOL への疾病管理プログラムの効果を、無作為化比較試験により検証するものである。

● 回復期リハビリテーション病棟における治療成績ベンチマークの開発の試み

財団法人長寿科学振興財団 リサーチ・レジデント/
日本福祉大学健康社会研究センター 研究員 鄭 丞媛

医療の質は病院経営に影響を及ぼす要因として、その重要性が高まっている。厚生労働省は、2008 年の診療報酬改訂において、医療の質および効率性を高めることなどを目的とし、「医療の質に基づく支払」(pay for performance : P4P) を回復期リハビリテーション病棟に新たに導入した。しかし、アウトカムを評価する指標の妥当性の検証は十分に行われておらず、今後の課題とされている。本研究では、リハビリテーション医療の成績の病院間比較を行い、ベンチマーキングを試みた。

★ 日本における疫学研究の公益性とプライバシー保護のバランスについての検討と社会的合意形成ならびにサイエンス・コミュニケーションのあり方に関する研究

国立成育医療センター研究所 成育社会医学研究部 成育疫学研究室長 坂本 なほ子

疫学研究では、成果が将来医療として社会に還元されるという利益（公益性）が期待される反面、個人情報の利用に関してプライバシー保護とのバランス議論を避けることができない。その対応の一つとしてインフォームド・コンセント（IC）があるが、個別のIC取得が時間的に、もしくは経済的、物理的に、または研究の科学性を担保するために不可能な場合もある。本研究は、倫理学の視点から倫理整理ならびに公益性とプライバシー保護のバランスの検討を目的として実施した。

テーマ：医療と地域社会

座長 矢作 恒雄

慶應義塾大学 名誉教授・尚美学園大学大学院 教授



■ 社会格差が保健医療システムのパフォーマンスに与える影響に関する国際比較研究：日本・米国・インドのナショナルデータを用いた分析

山梨大学大学院 医学工学総合研究部 社会医学講座 教授 山縣 然太郎

日本では経済状況の悪化に伴い所得格差が拡大している。本研究は所得格差が健康に与える影響（所得格差仮説）、およびそのメカニズムとしての相対所得（あるいは所得の相対的剥奪）による精神的ストレスの役割（相対所得仮説・相対的剥奪仮説）を外的妥当性の高いデータおよび解析アプローチにより検証することを目的とした。

☆ 生活環境の地域間格差と公的医療制度の評価に関する研究—選択型実験によるアプローチ—

九州大学大学院 経済学研究院 講師 浦川 邦夫

日本の貧困問題に関する研究を進めていくなかで、貧困は、個人間における能力差だけでなく、家族の健康、居住地域の医療・介護環境、所属している医療保険制度など、主に医療に関わる諸問題と非常に密接な関係にあるのではないかとの問題意識が生じている。そのため、本研究では、医療・介護環境を中心として各地域の生活環境と地域住民の生活実態・生活意識との関連性を調べる事により、わが国の医療政策を、諸外国の医療制度との比較を踏まえて評価・検証することとした。

☆ 類似自治体間の医療費関連指標と保健医療施策展開の比較研究

一般財団法人身体教育医学研究所 研究部長 岡田 真平

保健医療福祉施策の成果として期待される医療費・介護費の適正化について、同施策の影響を適時的に評価することは困難である。本研究は、その代替的な手段として各自治体の単年度データを全国、所属都道府県、及び類似する自治体の平均値と相対的に比較するための手法を開発し、これを活用する立場である自治体からの評価と、期待される成果（医療費・介護費）に対する保健医療福祉の各種指標との関連性の分析の両面から、自治体間での比較の有効性を検証することを目的とした。

☆ 在宅ターミナルケアを阻害する社会的・文化的因子の構造解析

静岡大学創造科学技術大学院 生命環境倫理学研究室 准教授 竹之内 裕文

日本における在宅ターミナルケアは、1994年の在宅末期総合診療科の導入を嚆矢として、医療・福祉制度の整備を中心に進められてきた。しかし、在宅ターミナルケアを普及させるためには、制度面における整備のみならず、患者やその家族の理解や認識のあり方が重要であるということが、国内外の先行研究から明らかになっている。そこで、在宅ターミナルケアを阻害する要因の社会的・文化的背景を明らかにし、もって、わが国の在宅ターミナルケアの進展に寄与することを企図して、本研究を実施した。

● 就業構造基本調査を用いた介護労働者の就業行動

慶應義塾大学大学院商学研究科 特別研究講師 石井 加代子

人口の高齢化が進む中、介護労働者の確保・定着は、早急に実現すべき政策課題として着目されている。特に、介護労働者における高い離職率や低い賃金は大きな問題として取り上げられているが、実際、これらに関するエビデンスはあまり多くない。そこで、本研究では、平成14年度『就業構造基本調査』（総務省統計局）の個票を用い、介護労働者の就業行動や賃金の状態を他産業で働く労働者のそれと比較することにより、高い離職率や低い賃金は介護労働者特有のものであるのかについて明らかにした。

テーマ：医療と情報提供

座長 宇都木 伸

東海大学法科大学院 教授



■ 日本人におけるヘルスリテラシーと健康関連行動、医療関連サービスの利用、健康関連クオリティー・オブ・ライフとの関係についての疫学的研究

筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター／
筑波大学大学院人間総合科学研究科臨床医学系 教授

徳田 安春

最近欧米諸国にて、ヘルスリテラシーが人々の QOL と関連する重要な因子であることが示されている。今回我々は、わが国の成人における、ヘルスリテラシーの現状とクオリティー・オブ・ライフとの関連性について調査した。本研究は、20 歳以上の日本人成人を対象とする横断研究であり、データ収集は、基本的な demographics や慢性疾患の有無と程度に加え、社会経済的因子についても調査した。

☆ 出生前診断に関する公平な情報提供のあり方

東京医科歯科大学生命倫理研究センター 特任助教

小笹 由香

出生前診断を受ける際には、検査を受ける利点・欠点、検査の実際と結果がもたらす影響などについて、妊婦や家族は、これまでの経験や知識に加え、遺伝カウンセリングでの情報提供を元に、自身の価値観に折り合いをつけ、検査の受否を決定している。

こうした情報提供は、胎児の障害に公平性が求められているが、一方で妊婦や家族は周囲や社会の価値観にも大きく影響される。したがって、目前の選択を迫られる妊婦や家族ではなく、社会に対しての公平な情報提供のあり方を明らかにすることを目的として本研究を実施した。

☆ サイエンスショップにおける臨床研究の可能性に関する基礎的研究

—日本における社会的・倫理的課題の検討—

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 准教授

西村 ユミ

サイエンスショップは、1970 年初頭にオランダの大学に設置されたのを起源とし、「市民社会が経験する懸念に応じて、市民参加に基づく独立の研究サポートを提供する」ことを目指した組織（窓口）である。大阪大学においても 2008 年度より、北欧型ショップをモデルとして、地域に開かれた組織作りを試みている。本研究は、大阪大学サイエンスショップに、医療や福祉にかかわる臨床的な問題が持ち込まれる可能性とその際の課題を検討することを目的とした。

テーマ：医療と教育・地域連携

座長 平野 かよ子

東北大学大学院医学系研究科 教授



■ 医師の客観的臨床教育能力評価に関する研究

— OSTE : Objective Structured Teaching Evaluation の試み—

長崎大学病院 医師育成キャリア支援室 准教授

浜田 久之

日本の研修医教育の向上のために、指導医の教育能力の評価方法の確立が急務である。しかし、指導する医師の指導方法、教育能力の評価に関して積極的な議論は日本にない。北米では、指導医の教育能力は、生涯キャリアの中で重要な項目であり、給与査定や契約に影響を及ぼす。

日本もこのような流れになる可能性があり、客観的な評価方法を作る必要がある。本研究の目的は、研修医を指導する医師の臨床教育能力を評価するためのものであり、北米の大学で注目されている OSTE < Objective structural teaching evaluation 客観的教育能力評価 >を試みた。

■ 保健医療サービスの国際化とマンパワーの流動化に対応する医学教育とヘルスプロモーションの効果的連携のしくみに関する研究

東京医科歯科大学大学院 歯学総合研究科 環境社会歯学系健康推進医学分野 教授

高野 健人

いわゆるグローバル化にとまない海外に出向いて医療サービスを受けたり、医療専門職が国を越えて流出流入する現象が活発化している。本研究の目的は、国を越えた医療サービスの現状と、医療専門職人口の流動を明らかにすることである。

■印は平成 19 年度の国際共同研究助成による研究／☆印は平成 19 年度の国内共同研究助成による研究／★印は平成 18 年度の国内共同研究助成による研究／●印は平成 21 年度一般公募演題

☆ 外来がん化学療法をうける患者・家族へのケアの標準化へ向けたガイドラインと教育プログラムの開発に関する研究

東海大学健康科学部 看護学科 成人看護学領域 講師 庄村 雅子

外来がん化学療法 (ATC) における看護の質の向上は、不可欠であり、ATC 看護の標準化・均てん化が期待される。本研究では、「外来がん化学療法看護の手引き」を作成し、それに基づいた看護を実践することにより、看護師への教育成果と課題を明らかにし、「手引き」を活用した看護の質保障に必要な教育プログラムを検討した。

● 経済的問題を抱える患者への MSW 支援機能と地域連携によるアプローチの検証

京都大学大学院人間環境学研究所共生人間学専攻博士後期課程 2 年 / 医療法人青洲会 まちかど よろず相談所長 (兼) MSW 清家 理

日本では介護保険制度導入後、患者が抱える問題を包括的に捉え、多職種がチームでアプローチする取り組みが展開されてきた。また、病院機能分化や医療費削減に伴う早期退院支援の必要性が台頭し、退院支援看護師や医療ソーシャルワーカー (MSW) を中心に、入院時から患者が抱える問題をスクリーニングする実践が行われている。しかし、経済的問題は「疾患の治療」のように根拠に基づいた、即座の対処方法が用意されておらず、問題が表層化しにくい。本研究では、経済的問題に対する MSW の支援内容に焦点化し、支援プロセスに基づき、MSW 支援機能を検証した。

3 第 18 回 (平成 21 年度) 研究助成金贈呈式

17:10 ~ 18:00

来賓挨拶

厚生労働省大臣官房厚生科学課長
ファイザー株式会社代表取締役社長

三浦 公嗣 氏
岩崎 博充 氏



三浦公嗣氏



岩崎博充氏



永井良三氏

第 18 回 (平成 21 年度)
助成案件選考経過・結果発表

選考委員長 永井 良三氏 (東京大学大学院医学系研究科内科学専攻循環器内科 教授) より、「ヘルスリサーチとは何か」についての説明に続いて、助成の応募状況と選考の経過・結果について発表されました。

(採択者リスト: 本誌 P13 ~ P15 に掲載)

	国際共同研究
	若手国内共同研究
	国内共同研究 年齢制限なし
	国内共同研究 39歳以下
	計

◆ 応募 (単位: 件)		◆ 採 択 (単位: 件、千円)			
第 18 回	第 17 回	第 18 回		第 17 回	
		件数	金額	件数	金額
55	70	6	17,800	7	30,600
—	113	—	—	15	29,400
77	—	10	10,000	—	—
90	—	16	15,470	—	—
222	183	32	43,270	22	60,000

研究助成金贈呈式

財団 島谷理事長より、研究助成採択者に贈呈状が手渡されました。



贈呈式風景

フォーラム終了後は情報交換会が開催され、和やかな歓談の輪が広がりました。



本フォーラムの内容をまとめた講演録をご希望の方は本誌に同封の申込書にて財団事務局までお申し込み下さい。
(尚、当日フォーラムにご参加された方には、3月下旬に既に送付致しております。)

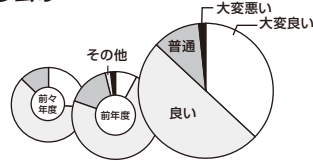
第16回ヘルスリサーチフォーラム
及び平成21年度 研究助成金贈呈式

アンケート結果報告

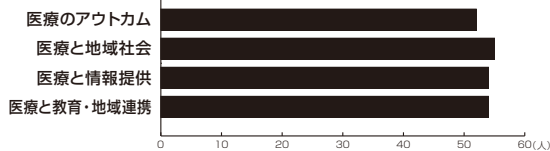
第16回ヘルスリサーチフォーラムの会場で行ったアンケートの結果は以下の通りでした。(回答数は68件でした。)

Q1 ヘルスリサーチフォーラムの内容全般について

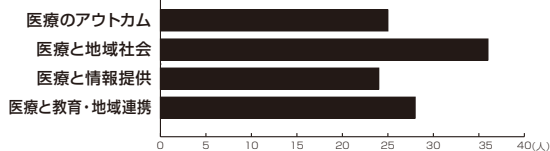
「大変良い」「良い」との評価が多数を占めました。



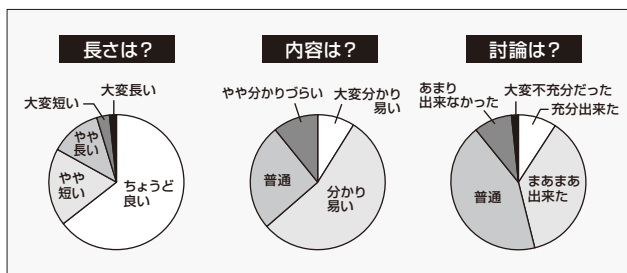
Q2 どのプログラムに参加されましたか？(複数選択)



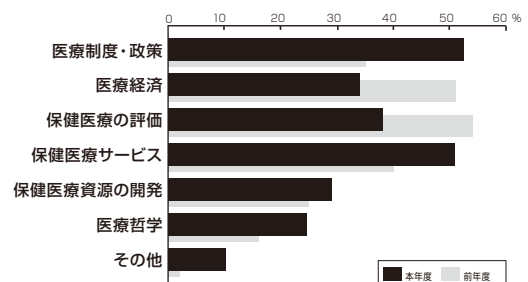
Q3 興味深いプログラムはどれでしたか？(複数選択)



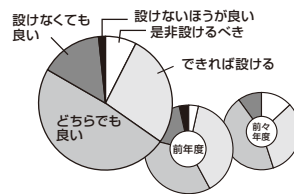
Q4 発表について



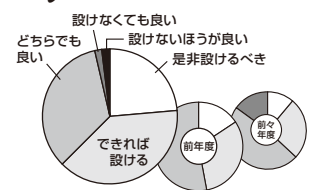
Q5 今後本フォーラムで取り上げて欲しい領域は？(複数回答)



Q6 今回はゲスト講演は設けませんでした、今後のゲスト講演について



Q7 情報交換会について



ご意見・ご希望

「ヘルスリサーチに特化した、他にない貴重な機会である」等、フォーラムに対する高い評価を多数いただきました。特に今回ランチョンセッションを設けず、会場を一カ所に絞ったことについては「全ての発表を落ち着いて聴くことができた」「多分野の発表が聴けて良かった」との意見でした。その一方、「発表の質にばらつきがある」、「発表時間超過が多過ぎる」等の意見も寄せられました。

アンケート結果を参考にして、ますます充実したヘルスリサーチフォーラムにしていきたいと思っております。ありがとうございました。

第18回（平成21年度）助成案件採択者一覧

（順不同・敬称略）

平成21年度 国際共同研究採択者

山本 晴子 (やまもと はるこ)

国立循環器病センター 臨床研究開発部 室長
研究テーマ 臨床研究の振興と実施体制に関する日米比較研究
共同研究者 ユーコ・Y・バレシュ
Department of Biostatistics, Bioinformatics and Epidemiology Medical University of South Carolina (米国) Professor
共同研究者 峰松 一夫
国立循環器病センター 脳血管内科 部長
共同研究者 嘉田 晃子
国立循環器病センター臨床研究開発部 室員
助成金額 3,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.31

神原 啓文 (かんばら ひろふみ)

静岡県立総合病院 院長
研究テーマ 急性期病院における4疾患の入院期間および費用に関する日本とカナダの比較研究
共同研究者 堺 常雄
聖隷浜松病院 院長
共同研究者 山内 一信
藤田保健衛生大学 教授
共同研究者 Paul Darby
Peterborough Regional Health Centre, Canada (カナダ) President and CEO
助成金額 3,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.31

佐々木 明子 (ささき あきこ)

東京医科歯科大学大学院 保健衛生研究科地域保健看護学分野 教授
研究テーマ 介護予防の必要な高齢者を早期に把握・対応するため、北欧で制度化している全高齢者への予防訪問の有用性と効果的運用方法を国際比較で明確化し、日本の介護予防活動における予防訪問の施策化の方向性を検討する。
共同研究者 Helli Kitinoja
Seinajoki University of Applied Sciences (フィンランド) Manager of International Affairs
共同研究者 Lene Hollander
1) Scandinavian Home Care Consult & Copenhagen Care Academy (デンマーク) Director
2) Asahikawa University (日本) Guest Professor
共同研究者 Harriet Persson
Health Consultant, Sweden (スウェーデン)
助成金額 2,800,000円 本研究期間 09.11.15 ~ 10.10.31

田宮 菜奈子 (たみや ななこ)

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 ヘルスサービスリサーチ分野 教授・分野長
研究テーマ 先進国における家族介護者支援の現状分析に基づく途上国への適用および日本導入におけるモデル提言 ドイツ、英国、日本およびチリの文献レビュー・疫学調査分析および学際的考察に基づく各国の今後の支援のあり方
共同研究者 ネアントロ サーヴェドラ リヴァノ
筑波大学大学院 人文社会科学部国際公共政策専攻 教授

共同研究者 本澤 巳代子
筑波大学大学院 人文社会科学部研究科法学専攻 教授 (社会・国際学群社会学類長兼務、学長補佐室員兼務)
共同研究者 ペドロ オリバーレス ティラド
筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 ヘルスサービスリサーチ分野 博士課程大学院生 / Superintendencia de Salud Ministerio de Salud Chile (チリ厚生省研究所) (チリ) 主任研究員
共同研究者 ゲルハルト イーグル
Christian-Albrechts-University (ドイツ) Professor (Director of the Institute for Social Law and Social Politic in Europe)
共同研究者 ウタ マイヤー=グレーヴェ
Institute for Home Economics and consumption research of the Justus Liebig University Giessen (ドイツ) Professor (Director of the Institute)
共同研究者 ベルント フォン マイデル
Max-Planck-Institute for Foreign and International Social Law (ドイツ) Director emeritus (研究所前所長)
助成金額 3,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.30

岩田 太 (いわた ふとし)

上智大学法学部国際関係法学科 教授 / 学部長
研究テーマ 本研究は、医療事故に対する制裁についての国際比較を行うことによって、処罰思想からの脱却を図るための方策を探る。特に、刑事介入の内実や、懲戒手続などとの相互作用を検討し、法の適正な役割を探索する。
共同研究者 デーヴィット・ハーシュ
Selborne Chambers (セルボーン・バリスタ事務所) 法廷弁護士 (ニューサウスウェールズ州) (Barrister) (オーストラリア)
共同研究者 ロバート・B・レフラー
アーカンソー大学法律大学院 (School of Law, University of Arkansas) (米国) 教授
共同研究者 磯部 哲
獨協大学法学部法律学科 准教授
助成金額 3,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.31

清水 栄司 (しみず えいじ)

千葉大学大学院医学研究院 神経情報統合生理学 教授
研究テーマ うつ病・不安障害の認知行動療法の質とEBM適応についての日英の医療制度比較
共同研究者 Paul M Salkovskis
Institute of Psychiatry (英国) Professor of Clinical Psychology
共同研究者 小堀 修
Institute of Psychiatry (英国) Post-doctoral research fellow
助成金額 3,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.31

合計 件数 6件 金額 17,800,000円

平成21年度 国内共同研究（年齢制限なし）採択者

柴 信行 (しば のぶゆき)

東北大学大学院 循環器 EBМ 開発学寄附講座 准教授
研究テーマ 当科で進行中の一万人の心血管疾患コホート研究 CHART-2 から、急性心不全を対象に複数病院間の戦略の差を検討し、診療戦略・患者背景因子・病院の社会的背景と予後や費用対効果の関連を解明する。
共同研究者 田巻 健治
岩手県立中央病院 副院長
共同研究者 井上 寛一
みやぎ県南中核病院 副院長
共同研究者 平本 哲也
大崎市民病院 副院長
助成金額 1,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.31

岡 檀 (おか まゆみ)

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 医療マネジメント専修 山内慶太研究室 後期博士課程
研究テーマ 自殺希少地域のひとつである徳島県田海部町の地域特性を、観察、インタビュー、アンケート、客観的指標の分析などをもって多角的に調査し、同町に潜在すると仮定される自殺予防因子を探索する。
共同研究者 石元 康仁
徳島県精神保健福祉センター 所長
助成金額 1,000,000円 本研究期間 09.11.1 ~ 10.10.30

八田 政浩 (はった まさひろ)
医療法人財団 夕張希望の杜 歯科診療部長
研究テーマ 要介護高齢者の肺炎に対する、専門的口腔ケアおよび肺炎球菌ワクチン、インフルエンザワクチン接種併用による肺炎予防効果の前向き比較研究：歯科と医科の連携の実践
共同研究者 和田 靖
医療法人財団 夕張希望の杜 理事、
介護老人保健施設 夕張 施設長
共同研究者 一木 崇宏
むかわ町国民健康保険徳別診療所 所長
共同研究者 佐村 淳知
日本赤十字社和歌山医療センター 研修医
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

黒田 美保 (くろだ みほ)
国立精神・神経センター 精神保健研究所 児童・思春期精神保健部 流動研究員
研究テーマ 現在、青年・成人期に初めて自閉症スペクトラムと気づかれる人が急増しているが、日本には妥当性のある診断・評価ツールが存在しないため、欧米のツールを基に日本の実情に合う直接観察診断・評価ツールを開発する。
共同研究者 福田 尚子
財団法人 日本リハビリテーション協会 リサーチ・レジデント
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

原田 賢治 (はらだ けんじ)
東京大学医学部 医療安全管理学講座 特任助教
研究テーマ 医療機関におけるハラスメント防止のためのeラーニング教材(コンピュータ・ネットワークを利用したオンライン問題集)の開発と、その活用による職員教育の有効性の検討
共同研究者 矢野 ゆき
東京大学 人事・労務系 労務・勤務環境グループ ハラスメント相談所 専門員、チームリーダー(相談員、臨床心理士)
共同研究者 佃 未音
東京大学 人事・労務系 労務・勤務環境グループ ハラスメント相談所 特任専門職員(相談員、臨床心理士)
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

鈴嶋 よしみ (すずかも よしみ)
東北大学大学院 医学系研究科障害科学専攻肢体不自由学分野 講師
研究テーマ 地域における拡大ロービジョンリハビリテーションシステムの構築とその効果に関する研究
共同研究者 陳 進志
東北大学医学部眼科学 臨床准教授
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

倉田 なおみ (くらた なおみ)
昭和大学薬学部薬剤学教室 准教授
研究テーマ 注射剤における薬品情報提供用紙の提供に関する実態と患者ニーズの調査、およびその啓蒙活動
共同研究者 近藤 直樹
国立がんセンター東病院 治験主任
共同研究者 西園 憲郎
益田 赤十字病院 薬剤部 薬剤部長
共同研究者 松井 周一
横浜市立大学附属病院 薬剤師
共同研究者 岡田 寛征
(株)八王子薬剤センター 教育・情報部 主任
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.10.1 ~ 10.9.30

赤井 朱美 (あかい あけみ)
神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科 准教授
研究テーマ 生活保護制度における医療扶助の研究—運用実態から検証する制度課題—
共同研究者 村上 正直
大阪大学大学院国際公共政策研究科 教授
共同研究者 ホアン・J・マシア
聖トマス大学(スペイン) 非常勤講師
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

飯原 なおみ (いはら なおみ)
徳島文理大学 香川薬学部 医療薬学教室 准教授
研究テーマ 患者の服薬行為ならびに化学療法への選好に係る潜在因子に関する研究
共同研究者 芳地 一
香川大学医学部 附属病院薬剤部長 教授
共同研究者 安西 英明
高松赤十字病院 薬剤部長
共同研究者 穂山 芳弘
坂出市立病院 薬局長
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

勝山 貴美子 (かつやま きみこ)
大阪府立大学看護学部 看護管理学分野 准教授
研究テーマ 看護専門外来を運営する専門(認定)看護師のコミュニケーションの特徴と患者のアウトカムの関連
共同研究者 田中 結華
大阪府立大学看護学部看護技術学分野 准教授(WOC認定看護師)
共同研究者 加藤 憲
愛知県医師会総合政策研究機構 主任研究員
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

合計 件数 10 件 金額 10,000,000 円

平成 21 年度 国内共同研究 (39 歳以下) 採択者

大野 直子 (おおの なおこ)
東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻 医療コミュニケーション学教室 大学院博士課程 2 年
研究テーマ 在日外国人のための医療通訳養成システム構築—医療コミュニケーション・通訳理論に基づいた医療通訳教育方法の開発
共同研究者 水野 真木子
金城学院大学 文学部 教授
共同研究者 穴沢 良子
武蔵野大学 看護学部 講師
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

高橋 亮 (たかはし りょう)
日本赤十字北海道看護大学 (小児看護学・国際看護学 兼任) 講師
研究テーマ 日本国内の病院に従事するインドネシア人看護師の組織市民行動の特徴と日本の職場との関連から、問題を明らかにする研究
共同研究者 清野 純子
国際医療福祉大学小田原保健医療学部 講師
助成金額 700,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

石井 優 (いしい まさる)
大阪大学・免疫学フロンティア研究センター 准教授
研究テーマ 破骨細胞機能の個体差異の解析に基づいた骨粗鬆症に対する新しいテララーメイド医療の開発

共同研究者 大島 至郎
独立行政法人国立病院機構 大阪南医療センター 臨床研究部・免疫異常疾患研究室(リウマチ科) 室長(医師)
共同研究者 石井 泰子
大阪大学医学部附属病院 免疫アレルギー内科 医員
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.12.1 ~ 10.11.30

日比野 由利 (ひびの ゆり)
金沢大学医薬保健研究域医学系 環境生態医学・公衆衛生学 助教
研究テーマ 格差と健康—社会政策としてのソーシャル・キャピタルの可能性—
共同研究者 高木 二郎
岡山大学医歯薬学総合研究科 公衆衛生学分野 講師
共同研究者 水野 真希
金沢大学医薬保健学研究域保健学系 看護科学領域 健康発達看護学講座 助教
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.30

野田 賀大 (のだ よしひろ)
神奈川県立精神医療センター 芦香病院 医療局診療科医師
研究テーマ うつ状態における「頭部瘀血」の病態メカニズムの解明及び「頭部瘀血」に対する鍼灸治療介入による病態変化の脳科学的解析
共同研究者 中村 元昭
横浜市立大学大学院医学研究科 精神医学部門 客員研究員

共同研究者 村上 裕彦
長野式鍼灸研究会、鍼灸治療院尚古堂 研究会代表、鍼灸師
共同研究者 伊東 新
長野式鍼灸研究会、鍼灸治療院尚古堂 鍼灸桃里院 研究会副代表、鍼灸師
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

浦水 理恵 (わきみず りえ)
筑波大学大学院 人間総合科学研究科看護科学専攻小児看護学 助教
研究テーマ “重症心身障害児（重症児）を育てること” に対する家族の困難を探る－在宅で障害児を養育する家族を取り巻く地域ケアシステムに焦点を当てて－
共同研究者 藤岡 寛
千葉県立保健医療大学 助教
助成金額 770,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

有馬 斉 (ありま ひとし)
東京大学大学院医学系研究科 特任助教
研究テーマ 尊厳死・安楽死に関わる思想（功利主義や自由主義、障害者等）や法制度における倫理的・法的概念を分類・整理した上で、その背景にある規範的理念の構造・論理の整合性を分析し、新たな知見を導出ないし提示する。
共同研究者 安部 彰
立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラル・フェロー
共同研究者 坂本 徳仁
国立障害者リハビリテーションセンター研究所 流動研究員
共同研究者 堀田 義太郎
立命館大学大学院先端総合学術研究科 日本学術振興会特別研究員 (PD)
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

作間 未織 (さくま みお)
京都大学大学院医学研究科医学教育推進センター 助教
研究テーマ 我が国の小児科病棟入院患者において、薬剤性有害事象ならびに薬剤関連エラーがどれくらいの頻度で発生しているのか、その発生率を明らかにし、それらの発生に関連する因子を調査検討する臨床疫学的研究
共同研究者 井田 博幸
東京慈恵会医科大学小児科学講座 教授
共同研究者 中村 嗣
島根県立中央病院 総合診療科部長
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

野尻(秋山) 直美 (のじり(あきやま) なおみ)
東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 地域看護学分野 博士課程大学院生
研究テーマ 過疎地に居住する要介護認定高齢者のヘルスケアコストに関連する要因の検討
共同研究者 福田 敬
東京大学大学院医学系研究科 臨床疫学・経済学分野 准教授
共同研究者 白岩 健
東京大学大学院薬学系研究科 大学院生
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

川上 浩司 (かわかみ こうじ)
京都大学 大学院医学研究科 薬剤疫学分野 教授
研究テーマ 日本における癌化学療法に伴う副作用の治療にかかる医薬経済についての調査研究 サブテーマⅠ：白金系製剤を用いた化学療法中に発現した悪心・嘔吐の治療 サブテーマⅡ：外来化学療法中に発現した副作用の治療
共同研究者 川上 純一
浜松医科大学附属病院 薬剤部 教授
共同研究者 及川 剛宏
筑波大学臨床医学系 腎泌尿器外科 講師
共同研究者 柳原 一広
京都大学医学部附属病院 外来化学療法部 准教授
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

尾形 倫明 (おがた ともあき)
東北大学大学院医学系研究科医療管理学分野 博士課程 大学院生
研究テーマ 介護者の選好に基づく介護給付の選択と介護保険に与える影響に関する研究－仮想評価法を応用した informal care の経済的価値－
共同研究者 森谷 就慶
東北文化学園大学医療福祉学部 准教授
共同研究者 千葉 宏毅
仙台住診クリニック 研究員
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.10.1 ~ 10.9.30

草間 真紀子 (くさま まきこ)
東京大学 大学院薬学系研究科 医薬品評価科学講座 助教
研究テーマ アドヒアランス向上のための薬局薬剤師の患者ケアに関する実証研究
共同研究者 五十嵐 中
東京大学 大学院薬学系研究科 医薬政策学講座 特任助教
共同研究者 柳澤 吉則
アリ薬局本店 取締役・管理薬剤師
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

榎屋 二郎 (ますや じろう)
東京医科大学精神医学講座 兼任講師
研究テーマ アスペルガー症候群を抱えた非行少年が日本の矯正機関でどのようなメンタルケアを受けているのか実態調査と内容分析を行い、より矯正効果とレジリエンスを向上させるメンタルケアの方法とその可能性を多角的に検討する。
共同研究者 内山 登紀夫
福島大学人間文化発達学類研究科 教授
共同研究者 堀江 まゆみ
白梅学園大学 子ども学部 発達臨床学科 教授
共同研究者 大石 剛一郎
東京弁護士会 弁護士
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.30

八田 太一 (はった たいち)
京都大学大学院医学研究科 医学専攻 臨床創成医学分野 大学院生
研究テーマ 外来化学療法におけるインフォームド・コンセントの観察研究～患者と医師を対象にした質問紙と観察によるミックス法を用いた研究～
共同研究者 成田 慶一
京都大学医学部附属病院 探索医療センター 研究員
共同研究者 柳原 一広
京都大学大学院医学研究科 探索臨床腫瘍学講座 准教授
共同研究者 石黒 洋
京都大学 講師
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.1.31

森脇 健介 (もりわき けんすけ)
神戸大学大学院 医学研究科 社会医学講座 医学統計学 特命助教
研究テーマ 日本における骨粗鬆症治療の医療経済評価研究－モデリングに基づく費用対効果の検討－
共同研究者 駒場 大峰
神戸大学 医学部附属病院 腎臓内科、腎・血液浄化センター 医員
共同研究者 深川 雅史
東海大学 医学部 内科学系 腎代謝内科 教授
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.11.1 ~ 10.10.31

山末 英典 (やますえ ひでのり)
東京大学大学院医学系研究科精神医学分野 准教授
研究テーマ 発達障害当事者およびその家族に対する心理社会的介入プログラムによる有効性の検討と精神的ケア向上に関する研究
共同研究者 加藤 進昌
昭和大学医学部精神医学教室 教授
共同研究者 桑原 斉
東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部 特任講師
助成金額 1,000,000 円 **本研究期間** 09.10.1 ~ 10.9.30

合計 **件数** 16 件 **金額** 15,470,000 円

平成 21 年度研究助成採択合計 **件数** 32 件 **金額** 43,270,000 円

(所属・肩書は申請時のもの)

第6回 ヘルスリサーチ ワークショップ を開催

－円熟味を増す“出会い”と“学び”の場－

平成22年1月30日(土)・31日(日)に、ヘルスリサーチ分野、保健・医療分野及び行政分野の研究者・実務担当者、メディア、外国人留学生、その他の計約50名の参加を得て、第6回ヘルスリサーチワークショップをアポロラーニングセンター(ファイザー(株)研修施設:東京都大田区)で開催しました。今回の基本テーマは「プロフェッショナリズム再考－希望と成熟の社会を目指して－」です。

第1日目

オリエンテーション

プログラム最初のオリエンテーションでは、幹事・世話人が壇上に整列して参加者をお迎えしました。次の中村 伸一さん(本ワークショップ 代表幹事)の歓迎の挨拶では、過去5回のHRWを写真で振り返るとともに、何故今回の基本テーマを「プロフェッショナリズム再考」としたのかについて、ユーモラスに、且つ、熱く、思いを語られました。最後に「さあ、議論しましょう。これは壮絶な2日間に亘る知的格闘技です。お楽しみ下さい」と締められました。

オリエンテーションの司会からは「分科会を通じてプロフェッショナリズムを再考して貰うが、結論は出さなくてもよい。“出会い”と“学び”が本ワークショップの目的なのだから」と説明され、この趣旨に従って、例年通り、ワークショップ中は、肩書きや立場を忘れるために、お互いに「さん」で呼び合う、あるいはニックネームで呼び合うというグラウンドルールが設定されました。

※ 参加者・関係者の所属は本ワークショップ開催時のものです。
また、敬称はグラウンドルールに基づき、全て「さん」とさせて頂きました。

自己紹介

次に全参加者から、「プロフェッショナリズムとは？」について予め各人がパワーポイントで作成してきたスライドを使いながらの自己紹介が行われました。ユーモア溢れる自己紹介に会場は温かい雰囲気になりました。



幹事世話人



オープニングスライド

開会挨拶



オリエンテーション司会

左: 大久保 菜穂子さん(世話人)
右: 後藤 勲さん(世話人)

中村 伸一さん
(幹事)

春 チーム



ファシリテーター

中村 伸一さん

大久保 菜穂子さん

①岡崎 研太郎さん(独立行政法人 国立病院機構 京都医療センター 臨床研究センター 予防医学研究室 研究員)、②岡田 真平さん(一般財団法人身体教育医学研究所 研究部長)、③佐藤 洋子さん(北海道大学大学院保健科学研究院 教授)、④清水 健太郎さん(大阪大学医学部附属病院 中央クオリティマネジメント部 特任助教)、⑤永田 高志さん(姫野病院救急総合診療科 部長/日本医師会総合政策研究機構 客員研究員)、⑥長沼 明さん(埼玉県志木市役所 市長)、⑦仁科 典子さん(株式会社ケアネット Web 統括部 Web 制作企画グループ)、⑧林 健太郎さん(医師(国際保健、熱帯医学、麻酔・救命救急))、⑨南 温さん(郡上市地域医療センター 国保和良歯科診療所 所長)、⑩Herrera Cadillo Lourdes Rosarioさん(大阪大学大学院人間科学研究科 特任研究員)

基調講演

NHK 制作局チーフ・プロデューサー 有吉 伸人さんより「私が出会ったプロフェッショナルたち」、堀田製作所代表 堀田 健一さんより「たった一人で作るオーダーメイド自転車」の演題で、基調講演をいただきました。

司会



左：中村 伸一さん（幹事）
右：秋山 美紀さん（幹事）



堀田 健一さん
堀田製作所代表



有吉 伸人さん
NHK 制作局チーフ・プロデューサー

堀田健一さんの基調講演は、秋山美紀さんがインタビュアーとなってインタビュー形式で行われ、奥様からお話をお聞きしました。

パネルディスカッション

次に、基調講演演者の有吉 伸人さん、堀田 健一さんに、中村 伸一さん（本ワークショップ 幹事）、秋山 美紀さん（同 幹事）が加わってパネルディスカッションが行われ、会場一体となった活発な意見交換が行われました。



分科会

参加者全員で記念撮影の後、いよいよ分科会です。春 チーム、夏 チーム、秋 チーム、冬 チームの 4 チームで、各部屋に分かれ、活発な討論が開始しました。今回は前回同様、各チームへ“切り口”が予め与えられずに、「プロフェッショナルリズム再考 — 希望と成熟の社会を目指して —」の基本テーマの下に、自由に討論することとされました。

夏 チーム



後藤 励さん

ファシリテーター
小川 寿美子さん

①猪飼 宏さん（京都大学 大学院医学研究科 医療経済学分野 助教）、②石井 誠之さん（東久留米クリニック 医師）、③上塚 芳郎さん（東京女子医科大学 医療・病院管理学 教授）、④小野崎 耕平さん（特定非営利活動法人日本医療政策機構 事務局長代行）、⑤金村 政輝さん（東北大学病院 総合診療部 講師）、⑥杉本 英夫さん（桐蔭横浜大学 スポーツ健康政策学部 スポーツテクノロジー学科 教授）、⑦関原 宏昭さん（株式会社ラ・ビュア地域デザイン研究所 所長／琉球大学 観光産業科学部 ツーリズム・ヘルスサイエンス研究分野 健康文化創造チーム キャプテン（主任研究員））、⑧中西 三春さん（財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 研究部 主任研究員）、⑨深見 真希さん（独立行政法人 日本学術振興会〈京都大学経済学研究科〉PD 特別研究員）、⑩浦水 理恵さん（筑波大学大学院人間総合科学研究科 助教）

情報交換会

夕食時は、立食形式の情報交換会により、“学び”とともにこのワークショップのもう一つの大きな目的である、参加者相互と幹事・世話人等の“出会い”と親交の輪が広がりました。

情報交換会途中には、基調講演者の堀田健一さんが製作した自転車の説明と試乗も行われ、和やかな雰囲気の中で時間が過ぎていきました。

中締めが行われた後でも、多くのグループが会場横のラウンジに残り、夜遅くまで歓談や討議をくり広げました。

司会



左：小川 寿美子さん（世話人）
右：都竹 茂樹さん（幹事）

会場風景



開会の挨拶



長谷川 剛さん
(サポーター)

乾杯の音頭



松森 浩士さん
(世話人)

中締めの挨拶



佐藤 忠夫さん
(前・財団事務局長)



▲堀田さん製作の自転車の試乗も行われました。

▼夜遅くまで続いた二次会・三次会討論▼



チーム



ファシリテーター



安川 文朗さん



秋山 美紀さん

▲2日目の分科会ではテーブルを密着させて密接な議論が行われました。

①石崎 順子さん (埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科 助教)、②奥 裕美さん (聖路加看護大学看護管理学 助教)、③梶岡 多恵子さん (東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 大学院生)、④阪本 直人さん (国立大学法人筑波大学大学院 人間総合科学研究科 (地域医療教育学) 講師)、⑤竹田 明弘さん (和歌山大学 観光学部 観光経営学 准教授)、⑥西澤 真理子さん (リテラジャパン (株式会社リテラシー) 代表取締役)、⑦西田 博さん (東京女子医科大学心臓血管外科 講師)、⑧野崎 真道さん (医療法人社団誠啓会 千葉中央メディカル健康スポーツセンター 所長)、⑨尾藤 誠司さん (独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター 教育研修部 臨床研修科医長)、⑩広多 勤さん (株式会社日経メディカル開発 編集部長)

第2日目

午前中は、前日に引き続いての分科会が行われ、午後からの各チームの発表に備えた追い込みの議論が展開されました。

● チーム別発表・全体討論

午後、再び全員が一堂に会して、チーム別の発表と全体討議が行われました。今回も、各チームの総合発表に加えて、各々の参加者の一言が加えられるという形式がとられました。



左：後藤 勲さん（世話人）
右：菅山 紀子さん（世話人）



午後3時、全プログラムが終了して、散会となりました。

このヘルスリサーチワークショップは、開催6回を経て益々その存在意義を高め、参加者からは「色々な領域の人と討論ができて非常に参考になった。ネットワークも拡大した」との意見をいただいています。

閉会の挨拶



中村 伸一さん（幹事） 島谷 克義さん（当財団理事長） 開原 成充さん（アドバイザー）

現在、この第6回ヘルスリサーチワークショップの内容の冊子の作成を進めており、8月頃完成の予定です。完成次第、財団ホームページ等でご案内いたします。

また、第7回ヘルスリサーチワークショップのテーマ及び参加者公募のお知らせは、6月頃財団ホームページで公開致します。

当財団ホームページアドレス <http://www.pfizer-zaidan.jp>

冬チーム



菅山 紀子さん

都竹 茂樹さん

①石川 善樹さん（McCann Healthcare Worldwide Japan Public Health Chief Researcher）、②石田 直子さん（インディペンデント・エディター）、③賢見 卓也さん（株式会社トロッパス 代表取締役 看護師）、④中村 明澄さん（千葉大学 大学院医学研究院 循環型地域医療連携システム学 助教/医学部附属病院総合診療部）、⑤藤本 晴枝さん（NPO 法人地域医療を育てる会 理事長）、⑥松村 真司さん（松村医院 院長）、⑦山崎 祥光さん（司法修習生・医師）、⑧幸 史子さん（熊本大学大学院社会文化科学研究科現代社会人文学専攻 交渉紛争解決・組織経営専門職コース2年/熊本大学医学部附属病院看護部 看護師長）、⑨和田 啓義さん（東京女子医科大学 整形外科教室 助教）、⑩渡辺 嘉之さん（株式会社総合医学社 代表取締役）

第6回ヘルスリサーチワークショップに参加して



「言葉の力」と「プロの議論」から得たもの

一般財団法人身体教育医学研究所 研究部長 岡田 真平

「自分は一体何のプロフェッショナルを目指しているのか？」—この悩みが本ワークショップを申し込んだ動機であり、標榜されていた「出会いと学び」から何か光を見出すことを願っていました。願いは叶ったか？と聞かれれば、確かな光を見出すことができた、と言えます。

有吉さんの講演に登場した数々のプロフェッショナルのエピソード、それを語る有吉さん自身、衝撃的な出会いだった堀田さんと奥様、どこも負けず劣らずの熱さが伝わってきた各チームの発表、賑やかだった夜の懇親会、そして何より、途切れることなく語り合ったチームメンバーとのディスカッション…と、求めていた光は随所に散らばっていました。

ディスカッションでは、プロ＝「個」ではなく「組織」という見方から、「プロを支える存在（例えば堀田さんの奥様）」、「縁の下の目立たないプロ」、「個（孤？）のプロの間に生じるポテンヒット（すき間＝ミス）」、「技だけでなく愛が大切（人のために何が出来るか）」、「いかにプロを育てるか」、「プロの組織とは？」等々、メンバーが発する「言葉の力」から話が次々に展開していき、最初の「一体自分は…？」という悩みとは違う次元に視野が広がったことは大きな喜びでした。これは、それぞれが異なる立場で仕事をしていても何か相通じる問題意識があり、互いに遠慮することなく意見交換ができた「プロの議論」だったからこそ得られた喜びだと思います（本当に素晴らしいチームワークでした！）。

「あなたにとってプロフェッショナリズムとは？」、これが参加するにあたって提示された課題ですが、見出した光を今の自分なりの言葉にすると、プロとは「ある理想に向かって、今自分がやるべき当たり前のことをひたむきにやり、しかし決して自分の力だけでなく時には皆の力を借りながら、また単に自分自身のためではなく皆のために取り組み続けようとすることによって、近づけるもの」なのかな、と思います。決して答えを求めたわけではありませんが、全く初対面の人たちと、限られた時間にもかかわらず、確実な手応えを得ながらこうしたことを感じられたのは本当に驚きでした。

ワークショップが終わって改めて趣意書に立ち戻ったときに、「希望と成熟の社会を目指して」企画された本ワークショップの重要性を再認識することができました。本会を支えていただいた財団の方々、立案から準備・運営までご尽力いただいた先生方、そして、熱い気持ちを持って集まった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。



「すごい」ワークショップ

京都大学 大学院医学研究科 医療経済学分野 助教 猪飼 宏

今回初めて仲間に加えて頂きました。集まった方が皆さん積極的に個性を発揮され、これほどまでに濃い人々のネットワークを築き上げられた財団の歴史にまず脱帽です。受付に足を踏み入れた瞬間からまるで皆が旧知であるかのように会話をできる「場」には、今まで5年間の開催を通じて世話人や参加者や財団の皆様が培われた文化の力を感じました。全体の運営もファシリテータの誘導も大変にスムーズで、深夜までアルコール燃料も焼べていただき、まさに「寝食を忘れて語り合うためにだけ用意された」環境はとても魅力的です。

基調講演のお二方が素晴らしく、堀田さんからは「自ら見出した社会の求める仕事を通じて、溢れる情熱に後押しされながら技術を高める姿」と、熱意だけでは超えられない「マネジメントの壁」を、また有吉さんからは何十名もの優れた仕事ぶりの見聞きを通じて抽象化された「プロフェッショナリズム」の共通点と多様性をお話いただき、それぞれ見事にその後の議論に火を付けて下さいました。今回のテーマは初対面の人たちも自分の経験を元に語りやすく、抽象的な議論にはまり込んでしまわずに最後まで現実的なディスカッションができたのも良いことでした。「希望に溢れる成熟した社会の実現に向けて、我々が目指すべき未来のビジョンを考察していきたい」と趣意書に書かれていた通り、私を含め多くのメンバーがそれぞれの仕事と社会とのかかわりを再認識し、今後もネットワークを活かしながらより発展させるべく自信を深めて家路に着いたに違いありません。

さて、一月ほどたった今、今回の参加が自分にとっての「ヘルスリサーチの振興」に結びついているかと静かに振り返ってみると、正直なところまだ自信がありません。各メンバーが「武器」として持つ研究手法を示し、お互いの「現場」に基づいた異なる問題意識から見つめなおし、新しい研究アイデアに結び付けるには、大きなグループ討論とは別にもっと小さく2～3名で語り合う時間もあれば良かったのですが、一晩ではとても時間が足りません。「新たな出会い」の興奮だけに溺れることなく、これからもご縁を大切に深めつつ、今回のワークショップで見られたオープンな議論の文化を身の回りにも導入できるように工夫を重ねながら、コツコツと独創的な研究成果を出せるように努力を続けて参りたいと存じます。

皆様どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願ひします。

刺激と学びの2日間

和歌山大学 観光学部 観光経営学科 准教授 竹田 明弘



ヘルスリサーチニュースの記事でHRWの存在を知り、是非参加したいと希望しました。当日は、基調講演から始まり、そこから春・夏・秋・冬の4チームに分かれて、少人数のディスカッションという流れでしたが、いずれのプログラムも非常に私の知的好奇心を刺激するもので、とても満足させていただきました。プロフェッショナルに共通するキーワードは“技術と心”であるという有吉氏の基調講演、また、ハンデキャップをお持ちのお客さんに、自分の作った自転車ですら少しでも快適に街を走って欲しいと熱く語られた堀田氏の基調講演は、私の心に響くものでした。プロフェッショナルは何らかの卓越した技術・能力が必要条件です。それがなければ、クライアントの要求に十分に答えることは不可能です。しかし、当日の基調講演は、クライアントの要望に真に答えるためには、なんとかしてあげようという“気持ち”の部分が最も大事であるという事を再認識しました。気持ちがあれば、技術を高めようとする意欲も高まります。さらに、患者の真のニーズを汲み取り、それに答えてあげようとする事で、より高いレベルでの患者満足の実現にもつながっていくのではないのでしょうか。基調講演に次いで行われたチームディスカッションでは、秋チームに参加させていただきました。そこでは、医師や看護師だけでなく様々なバックグラウンドを持つ方々と熱い議論、まさに刺激の連続でした。専門が違えば、言葉や解釈の違いなど価値感が微妙に異なるものです。私自身は、専門の違う方と触れ合う事で、その違いを認識・理解しようという目的でワークショップに参加させていただいたのですが、議論を重ねる中でチームの解釈がどんどん一つになる様子を体感しました。このような素晴らしい秋チームで議論できたこと、素晴らしいメンバーでチームが構成されていたことに感謝します。今後は、この経験を活かして、医療者が前向きな感情で業務に専念でき、さらに患者自身もこれまで以上に素晴らしい医療を（個人的には今でも日本の医療体制は素晴らしいと思います）受療出来るという両方の課題を同時追求できる管理システムを経営学の観点から考えていきたいと思えます。まさに、刺激と学びの2日間でした。

最後になりますが、このような場を提供していただいた、幹事・世話人の先生方、ならびにファイザーヘルスリサーチ振興財団の方々にお礼を申し上げます！

たくさんの出会いに感謝！！

千葉大学 大学院医学研究院 循環型地域医療連携システム学 助教／
医学部附属病院総合診療部 中村 明澄



朝、会場最寄り駅で、方向音痴の私は、右にいくべきか左に行くべきか地図と格闘していました。そんなとき、開催要項のピンクの表紙を見て、1人の参加者が声をかけて下さり、会場まで一緒することに。ワークショップの「参加する“あなた”が何かを始めるためのお手伝いをするための集まり」「楽しみながら学び合う2日間」というキーワードを胸に、緊張しつつも思いきって自分からも話を切り出してみました。思わず会場を通りすぎかけるほど話が弾み、自分のキャリアを考える上で貴重なお話を聞くことができました。思いがけないワークショップのオープニングを迎えて胸が高まる思いでした。受付を済ませた後、昼食会場に向かうと、「わあ久しぶり!! 元気?」と盛り上がっている声。昨年までの盛大なワークショップを思わせる活気ある雰囲気に後押しされ、緊張しながらも他の参加者の方と様々なお話をすることができました。限られた人の中で毎日を送っていた私にとって非常に刺激的な時間で、新たな世界が広がりました。

分科会では、プロフェッショナルについて職種の様々な参加者の意見を聞くことができ、これまでとは違った角度でプロフェッショナルをみつめることができました。情報収集が容易となり知識量ではプロに限りなく近くなることのできる世の中で、技と心のバランスのとれたプロフェッショナルとはどういうものか、なぜ今、医療現場でプロフェッショナリズムが失われつつあるのか、活発な議論となりました。

医師としてプロであるということに不安と疑問を抱き日々困惑していた私でしたが、このワークショップを経て新たな考えを持つことができました。有吉伸人さんの基調講演での、プロフェッショナルとは「当たり前のことを毎回当たり前でできる人」という言葉。自転車づくりをとにかく楽しんでいらっしゃる堀田健一さんの姿。分科会での「第一線にいる人に常に自信があるわけではない。不安と闘う術を持っている。」という発言。書き出したらきりがありませんが、ワークショップの温かく活気あふれる雰囲気をはじめ、大きな勇気をもらいました。不安があることが悪いことではない。それをいかに乗り越えていくかが鍵。当たり前のことを確実にこなすと同時に、高いハードルを設けそこにむかって楽しみ、そして変化しながら進んでいく。それがプロであるのだと自分の中で納得できました。

本当に素敵な楽しい2日間を過ごすことができました。幹事、世話人の先生方をはじめ、ファイザーヘルスリサーチ振興財団の皆さまに本当に感謝しています。また来年もぜひお目にかかりたいです。どうもありがとうございました。

第 36 回評議員会並びに第 36 回理事会を開催

平成 22 年度は助成総額・件数とも拡大

東京都渋谷区の新宿文化クイントビルで、3月1日（月）に第36回評議員会が、3月9日（火）に第36回理事会が開催され、平成22年度の当財団の事業計画、収支予算、その他が審議されました。

平成22年度は、ファイザー株式会社からの寄付金及び基本財産の運用益により、昨年度4,327万円だった助成総額を6,000万円に増額し、助成件数も昨年度の32件から40件へと拡大することが決定しました。

又、平成22年度中の特定公益財団法人への移行を目指し、移行スケジュール、その他必要事項が審議、採決されました。

本年度の主な事業内容は以下の通りです。

(1) 助成事業

- ① 「国際共同研究助成」、「国内共同研究助成（年齢制限なし）」、「国内共同研究助成（満39歳以下）」の3事業を実施する。

内訳は

「国際共同研究助成」10件	1件300万円以内、総額3,000万円
「国内共同研究助成（年齢制限なし）」15件	1件100万円以内、総額1,500万円
「国内共同研究助成（満39歳以下）」15件	1件100万円以内、総額1,500万円

で、合計6,000万円です。

- ② 募集時期：平成22年4月～6月30日（水）

- ③ 採否通知：平成22年9月下旬

- ④ 助成金支払時期：平成22年11月10日（水）以後

第17回ヘルスリサーチフォーラム及び平成22年度研究助成金贈呈式＜平成22年11月6日（土）開催＞終了以後に支給開始。

(2) 財団機関誌「ヘルスリサーチニュース」

前年度に引き続き年間2回（4月・10月）発行とします。



挨拶をされる
島谷 克義理事長



理事会

評議員会



来賓挨拶をされる
厚生労働省大臣官房
厚生科学課長
三浦 公嗣氏

(3) 第17回ヘルスリサーチフォーラム・研究助成金贈呈式 及び 講演録

ヘルスリサーチフォーラム及び助成金贈呈式を以下の通り実施します。

開催日：平成22年11月6日（土）

会場：千代田放送会館（千代田区紀尾井町）

後援：厚生労働省

協賛：医療経済研究機構

テーマ：社会と共進化（co-evolution）するヘルスリサーチ

平成19年度助成の国際共同研究、平成20年度助成の国際共同研究並びに国内共同研究の成果発表、平成22年度公募の一般演題発表及び討論等を1会場方式で開催すると共に一部の演題をポスターセッションとして併催します。フォーラム終了後に平成22年度の研究助成発表・贈呈式を行います。

フォーラムの内容を記録した講演録を従来通り3,000部作成・配布します。

(4) 第7回ヘルスリサーチワークショップ 及び 小冊子

概略下記予定で第7回ヘルスリサーチワークショップを開催します。

開催日：平成23年1月29日（土）・30日（日）

会場：アポロラーニングセンター（ファイザー（株）研修施設）（予定）

参加者：40名程度（推薦と公募を予定）

記録：翌年度に小冊子を3,000部程度作成・発行します。

テーマ等詳細は、今後のヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人会で決定していきます。

(5) 第10回北里・ハーバードシンポジウムへの後援

従来から実施してきた北里・ハーバードシンポジウムへの後援を、平成22年度も継続します。

これらを含めた財団の平成22年度事業計画は次の通りです。

平成22年度事業計画

◆◆平成22年度事業概要◆◆

研究等助成 1. 国際共同研究事業

保健医療福祉分野の政策あるいは、これらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチの研究テーマについて国際的な観点から実施するヘルスリサーチ領域の共同研究への助成。

期間：原則として1年

助成件数：10件

助成金額：1件 300万円以内

募集方法：公募／財団ホームページ、大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）、医療経済研究機構レター、ヘルスリサーチニュース（4月号）に公募記事掲載。
大学、研究機関、学会、都道府県医師会／歯科医師会／薬剤師会／看護協会、都道府県・政令指定都市保健所長会等にチラシ配布。

2. 国内共同研究事業（年齢制限なし）

保健医療福祉分野の政策あるいは、これらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチの研究テーマについて国内におけるヘルスリサーチ領域の共同研究助成。

期間：原則として1年間

助成件数：15件

助成金額：1件 100万円以内

募集方法：公募／財団ホームページ、大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）、医療経済研究機構レター、ヘルスリサーチニュース（4月号）に公募記事掲載。
大学、研究機関、学会、都道府県医師会／歯科医師会／薬剤師会／看護協会、都道府県・政令指定都市保健所長会等にチラシ配布。

3. 国内共同研究事業（満 39 歳以下）

保健医療福祉分野の政策あるいは、これらサービスの開発・応用・評価に資するヘルスリサーチの研究テーマについて取り組む若手研究者の育成を目的とする助成。

期 間：原則として 1 年間

助成件数：15 件

助成金額：1 件 100 万円以内

年齢制限：満 39 歳以下（平成 22 年 4 月 1 日現在）

募集方法：公募／財団ホームページ、大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）、医療経済研究機構レター、ヘルスリサーチニュース（4 月号）に公募記事掲載。
大学、研究機関、学会、都道府県医師会／歯科医師会／薬剤師会／看護協会、都道府県・政令指定都市保健所長会等にチラシ配布。

財団機関誌の刊行 （ヘルスリサーチニュース）

事業及びその成果を情報として提供し、研究の推進、啓発を図る。また、ヘルスリサーチの啓発と実践的な展開を目指して年 2 回発行（4 月 10 月）し情報提供を行う。

配 付：年 2 回 A4 20～24 頁 9,000 部

配付方法：財団関係者、全国大学の医学部、薬学部、看護学部、経済学部、法学部、社会学部、医療機関、都道府県医師会／歯科医師会／薬剤師会／看護協会、都道府県・政令指定都市保健所長会、報道機関等へ郵送。

第 17 回 ヘルスリサーチ フォーラム・ 研究助成金贈呈式 及び講演録

ヘルスリサーチフォーラムと平成 22 年度研究助成金贈呈式を併催する。

平成 19 年度助成の国際共同研究、平成 20 年度助成の国際共同研究及び国内共同研究の成果発表、平成 22 年度公募の一般演題発表及び討論等を 1 会場方式で開催すると共に一部の演題をポスターセッションとして併催する。フォーラム終了後に平成 22 年度の研究助成発表・贈呈式を行う。贈呈式においては、厚生労働省大臣官房厚生科学課長、出捐企業代表者挨拶に続いて、研究助成金授与を行う。最後に、選考委員長による本フォーラムの総括が行われる。ヘルスリサーチフォーラムの成果発表及び平成 22 年度研究助成内容・研究助成金贈呈式の内容は小冊子として纏め、平成 23 年 3 月に配布する。

テーマ：社会と共進化（co-evolution）するヘルスリサーチ

開催日：平成 22 年 11 月 6 日（土）

会 場：千代田放送会館（千代田区紀尾井町）

後 援：厚生労働省

協 賛：医療経済研究機構

参加者：財団役員、選考委員、関係官庁、報道関係者、共同研究発表者、助成採択者、出捐会社役員、LSF 懇談会メンバー等 200 名

小冊子：A4 版 350 頁 3,000 部

第 7 回ヘルスリサーチ ワークショップ 及び小冊子

当財団の主たる事業として、将来のヘルスリサーチ研究者・実践者の戦略的な育成とヘルスリサーチという学際的な研究の効果的・効率的な促進を通じて保健医療の向上への貢献を目指している。その一環として、平成 21 年度に引き続きヘルスリサーチワークショップを開催し、当該領域を志向する研究者・実践者の人的交流と相互研鑽に焦点を当て“出会いと学び”の場を作り、ヘルスリサーチ研究の領域をリードしていきたいと考え主たる事業として当該ワークショップを開催する。当財団の従前からの主たる事業であるヘルスリサーチの研究助成に新たな命題を創造提供する事を期待すると共にその内容を小冊子としてまとめ次年度に配布する。

開催日：平成 23 年 1 月 29 日（土）～1 月 30 日（日）

会 場：アポロラーニングセンター（ファイザーの研修施設）を予定

参加者：ヘルスリサーチの研究を志向する多分野の研究者等 40 名（推薦＋公募）

小冊子：B5 版 100 頁 3,000 部を次年度に作成予定

（平成 21 年度第 6 回開催分の小冊子は本年度作成・配布予定）

テーマ：本年度のテーマ等はヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人会で決定する。

第 10 回 北里・ハーバード シンポジウムへの 後援

開催予定：平成 22 年 10 月 13 日（水）～14 日（木）

主 催：北里大学・ハーバード大学

後 援：ファイザーヘルスリサーチ振興財団

参加者：治験に関係するドクター、製薬会社、規制当局関係者 600 人

開催場所：日経ホール（予定）

内 容：未定

テ ー マ：未定

◆ ◆ 平成 2 2 年 度 予 定 表 ◆ ◆

事業年度		平成21年度			平成22年度											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
運営会議	理事会 評議員会	平成22年度 事業計画・予算 3月9日(火) 第36回 3月1日(月) 第36回			平成21年度事業報告・決算報告 新年度現況報告 5月: 第37回 5月: 第37回 監事決算監査									平成23年度 事業計画・予算 3月第38回 3月第38回		
	事業関連 選考委員会	2月12日(金)第53回 新年度助成方針			選考方針・作業分担 7月29日(木): 第54回 最終選考 8月31日(火): 第55回									2月 第56回/新年度助成方針		
助成事業他	公募 選考 選考結果	応募要綱作成			公募期間(配布・紹介) 6/30 案内・広告 公募現況報告 最終公募とりまとめ 選考作業面接 正式発表・通知 参加者募集 11/6(土) 一般演題公募 一般演題選考決定 幹事世話人会 幹事会 幹事世話人会									平成23年度 応募要綱作成 第17回 小冊子 刊行 第17回 小冊子 刊行 第7回ワークショップ開催 1月29/30日(土、日)		
	第17回ヘルスリサーチフォーラム &助成金贈呈式 第7回ヘルスリサーチワーク シヨップ ヘルスリサーチニュース発行 (年2回発行) 第10回北里・ハーバード シンポジウム	第16回 小冊子 刊行 幹事世話人会												第17回 小冊子 刊行 第7回ワークショップ開催 1月29/30日(土、日)		
管理業務	(一般業務) 平成22年度予算・事業計画作成 平成21年度決算処理 厚生労働省報告(予算・決算書) 助成金支払い 平成23年度予算・事業計画作成	特増更新			予算書 決算報告書 11/10											



宮澤 健一 先生 ご逝去

当財団理事の宮澤 健一先生（一橋大学名誉教授、財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構所長）が、平成22年1月9日、午前9時15分、心不全のため神奈川県内の病院でご逝去されました。

享年84歳でした。

宮澤先生は平成11年4月から当財団理事を勤めてくださり、財団事業の発展にひとかたならぬご尽力を賜りました。改めてそのご功績に深く感謝いたしますとともに、つつしんでご冥福をお祈りいたします。

第17回

ヘルスリサーチフォーラム 及び 平成22年度助成金贈呈式

第17回ヘルスリサーチフォーラムを下記の通り開催いたします。
詳細は次号本誌（平成22年10月発行、秋季号）でご案内いたします。

参加費
無料

テーマ：社会と共進化（co-evolution）するヘルスリサーチ

日 時：平成22年11月6日（土）

正午12時～午後18時10分
（午前11時からポスター見学可）

参加しやすい半日のフォーラムです。

会 場：千代田放送会館

（東京都千代田区紀尾井町）

内 容：プレゼンテーション形式での発表
（ホールセッション及びポスターセッション）

主 催：財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団

後 援：厚生労働省

協 賛：財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会
医療経済研究機構

第16回

ヘルスリサーチフォーラムの講演録が完成しました。

平成21年11月7日（土）に開催した第16回ヘルスリサーチフォーラム及び平成21年度研究助成金贈呈式の内容を記録した講演録が完成しました。第16回フォーラムの熱い発表と討議の記録であるとともに、最新のヘルスリサーチ研究の潮流を知るための格好の内容となっております。無料（但し数量限定）にてお送りいたしますのでご希望の方は別紙申込書によってお申し込み下さい。

〈当日フォーラムにご参加された先生方には既にお送りいたしております〉



ご寄付をお寄せ下さい

当財団の活動は、基本財産の運用に加えて皆様からのご寄付により行われています。当財団は、ご寄付をいただいた方々が、税務上の特典を受けられる特定公益増進法人の認定を受けております。

特定公益増進法人とは、公益法人のうち、教育又は科学の振興、文化の向上、社会福祉への貢献、その他公益の増進に著しく寄与すると認定されたもので、これに対する個人又は法人の寄付は右に示す通り税法上の優遇措置が与えられます。（詳細は財団事務局までお問い合わせ下さい）

手数料のかからない郵便局振込用紙を同封しております。財団の事業の趣旨にご理解下さるようお願いいたしますとともに、皆様からのご寄付をお待ちしております。

個人の場合

1年間の寄付金の合計額（その年の所得の40%相当が限度額）から、5千円を引いた金額が所得税の寄付控除の対象となります。

法人の場合

寄付金は、通常一般の寄付金の損金算入限度額と同額まで別枠で損金算入できます。

ご不明な点は何なりと財団事務局までお問い合わせ下さい。

TEL：03-5309-6712

ご寄付御礼

昨年9月以降本年2月までに以下の方々からご寄付をいただきました。謹んで御礼申し上げます。

木村 克弘 様	古市 絹子 様	内藤 優人 様	馬場 継 様	矢萩 隆文 様	廣田 孝一 様
河野 潔人 様	池原 清春 様	高橋 宏次 様	高野 哲司 様	難波 理恵 様	森山美知子 様
平野 章 様	田柳 勝男 様	陶山 数彦 様	小野 和敬 様	武田 里枝 様	
北島 行雄 様	小倉 政幸 様	渡辺 尚之 様	小林 康郎 様	鈴木 忠 様	
南里 秀之 様	朝日健太郎 様	山口企世史 様	桑原 理絵 様	山下 節子 様	
共和クリエイト株式会社 様		ファイザー株式会社 様			

（順不同）